

二〇一六年一月四日

師の句碑を訪ね寺院の秋を聞く
団栗を拾ひては馳す母の元
ぬくぬくの焼栗頒けて句座なごむ

有 香
やよい
はく子

二〇一六年一月三日

峠いま野菊の路となりけり
錦して朝日に燃ゆる信濃富士
朝刊にチラシどつさり文化の日

智恵子
なつき
三 刀

二〇一六年一月二日

飛鳥路や秋寂ぶ謎の石めぐる
斧入らぬ原生林の秋を聞く

宏 虎
やよい

二〇一六年一月一日

翼下いまパズルのやふな刈田かな
石室の明王の灯のうそ寒し
火山灰(よな)畑に太りし大根もらひけり
青鷺のかたまつてをる寒さかな
のど飴を舐めつつ耐へる紅葉冷

なおこ
なつき
こすもす
三 刀
こすもす

二〇一六年一〇月三日

鴨潜り浮寝の陣に加はらず
里山の裾野を埋む泡立ち草
島山の全山染めて青蜜柑
抽んでし宮の神杉秋高し

菜 々
三 刀
宏 虎
さつき

二〇一六年一〇月三〇日

桶ひとつ抱かゝ渡り湯もみじ宿
島バスと併走するは赤とんぼ
紅葉燃ゆ守り継がれし武家屋敷
秋雲に見えつ隠れつ飛機の影

智恵子
なおこ
やよい
なおこ

工場の庭の一隅 秋 桜

さつき

二〇一六年一〇月二九日

地団駄を踏んで確かむみなし栗
校庭に大鍋囲み芋煮会
夕日落つまでの束の間秋惜しむ
月の出を待ちつつ歩く川堤
行く雲に心あそべば小鳥来る
秋惜しむ旅の翁の碑をなぞり
朝まだき神杉霧に抽ん出し

ともえ
智恵子
満 天
ま ゆ
よし女
明日香
さつき

毎日句会みのる選・二〇一六年十一月六日